様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６８７０１６０

研究課題名（和文）ヨーロッパ理念とその政治的・社会的反響――ロマン主義、欧州統合、レイシズム

研究課題名（英文）The Idea of Europe and Its Political and Social Repercussions: Romanticism, European Integration, Racism

研究代表者
片岡　大右（Kataoka, Daisuke）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員

研究者番号：３０６００２２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパの理念は、19世紀以降現在に至るまで、そのときどきの歴史的争点と、どのように絡み合ってきたのか。本研究は、ヨーロッパ理念の政治的・社会的・文化的反響の諸相の総合的把握の一端をなすべく、ロマン主義、欧州統合、そして――当初予定していたレイシズムに替えて――加藤周一のヨーロッパ論を三つの主要な軸とする思想史的観点からの分析を試みた。ポーコックの議論に注目し、「啓蒙のヨーロッパ」と今日のヨーロッパ理念との断絶を浮き彫りにするとともに、とりわけベニシューと加藤のロマン主義論を通して、近代社会の形成におけるロマン主義の決定的性格を強調した。

研究成果の概要（英文）：In an effort to make a contribution to a global comprehension of diverse aspects of political, social and cultural repercussions of the idea of Europe, I tried in this study to focus on three key themes: romanticism, European integration and - instead of racism that I had mentioned in my research plan - interpretations of European thought and literature by Shuichi Kato. In relying on the work of J. G. A. Pocock, I underlined a rupture between the Europe of the Enlightenment and the present-day idea of Europe, while, through an examination of Benichou's and Kato's approach to romanticism, I reemphasized decisive character of this cultural movement in the formation of modern society.

研究分野：思想史、フランス文学

キーワード：欧州統合　J・G・A・ポーコック　ポール・ベニシュー　加藤周一　ロマン主義　スタンダール　シャトーブリアン

１．研究開始当初の背景

博士論文以後、科研費の助成を受け、「ヨーロッパ、ネイション、文明――思想史的アプローチによる」の題目のもとに行った研究を通して、申請者はヨーロッパの理念が 16 世紀以降現在に至るまでの歴史状況の中で果たしてきた役割を、ネイションおよび文明という二つの理念との関わりを念頭に置きつつ見極めてきた。例えば、論文「革命家と首相の見たアフリカとカリブ海域」においては、英領カリブの島トリニダード出身の黒人思想家・活動家Ｃ・Ｌ・Ｒ・ジェイムズが、典型的なイギリス支配層の教育を受け、ヨーロッパ文明の粋を吸収した彼ならではのやり方で、社会主義的な文明理念を古代ギリシアの都市国家を範例としつつ提示していることが示唆されているし、ドゥノール＆シュワルツ『欧州統合と新自由主義』翻訳およびその解説論文を準備する過程でなされた研究においては、いわゆる「新自由主義」の経済的イデオロギーの発生と展開に際してのヨーロッパ理念の重要性が明らかになった。ベニシューの『フランス・ロマン主義』四部作をめぐる二つの学会での刊行プレ・イベントでは、ロマン主義運動の汎ヨーロッパ的性格が再確認されるとともに、各国ロマン主義の差異をめぐり、最新の研究動向を踏まえての討議がなされた。論文「フランスと日本の右傾化とレイシズム」においては、フランスおよび欧州諸国の新しい極右的イデオロギーの担い手である「アイデンティティ派」の運動を論じたが、この運動を特徴づけるのは、各国のナショナル・アイデンティティの確立という旧来の右翼にとっての課題を、一方では国民国家内部の諸地方の独自性の再評価によって、他方では諸国民国家を包摂するヨーロッパ・アイデンティティの重視によって、補完することである。

２．研究の目的

これまでの研究を通して浮かび上がってきたこうした諸課題を踏まえ、本研究では、ロマン主義、欧州統合、レイシズムの三つの主題を導きの糸として、19 世紀から現在に至るまでの様々な時代状況の中でのヨーロッパ理念の機能を分析することを企てた。これら三つの主題をめぐるこれまでの研究蓄積とヨーロッパ理念をめぐる探求の双方に新たな光を当て、申請者の長期的な研究課題であるこの理念の独自の諸特徴を歴史的文脈の中で解き明かすことで、その様々な帰結と効果とを明らかにする作業の一環となすのがその目的である。

また派生的な研究として、明治以降現代に至るまでの日本における文明論の系譜を跡付ける作業を、引き続き行っていくことも目指された。近年の欧米におけるヨーロッパ論が欧州統合の現実に大いに活気づけられているのと同様、「西洋の衝撃」のもとに近代化を企ててきた明治以降の日本においても、福沢諭吉から梅棹忠夫に至るまでの様々な文明論が、西洋との関係で日本をどのように位置づけるべきかという問題に取り組んできたが、近代日本におけるこうした西洋文明論の歴史的文脈を跡付ける作業は、現代欧州におけるヨーロッパ論が現在抱えている諸困難、そこに露呈している不安の意識――もはやヨーロッパと一体をなしているとはみなされないアメリカ合衆国、外部においてのみならずヨーロッパ内部においてもプレゼンスを強めるイスラム人口、独自の文明を掲げつつ台頭する中国等々の存在が掻き立てる、自らがもはや唯一の普遍的な文明の体現者を名乗りえないのかもしれないという不安――の把握に際しても大いに助けになるはずだ、と考えてのことである。

３．研究の方法

ヨーロッパ理念との関係をつねに視野に置きつつ、三つの主要主題を中心とする諸課題をめぐり研究を進める。当初構想されたのは、（１）ロマン主義研究――この汎ヨーロッパ的運動の全体像を視野に収め、共通の諸特徴を確認する一方で、個別の政治的・社会的・文化的状況が、各国の運動にどのような屈折をもたらしているのかを検討すること――、（２）欧州統合研究――経済政策上の賭け金の重要性をふまえつつ、例えばハイエクがたんに経済学者であるにとどまらず文明理論化であり社会思想史家であったことからも知られるように、問題が経済思想にとどまらない広がりを持っていることの検討――、（３）レイシズム研究――「新右翼」の誕生から GRECE と「大時計クラブ」の活動と国民戦線の台頭を経てアイデンティティ派の登場までの思想史的検討――の組み合わせである。そして、申請者が博士論文で中心的に扱ったシャトーブリアンに替わる新たな形象を求めて、ジョゼフ・ド・メーストルの研究によって、本研究の諸課題の相互連関を浮き彫りにすることを想定していた。

４．研究成果

まずは、研究の基本的な枠組みを、一部組み替えるに至ったことを述べておかなければならない。具体的には、三つの主要主題として掲げたもののうち、レイシズムの諸問題についての成果発表はのちの機会に委ねることとして――その主たる理由は、参加予定だった叢書企画の消滅である――、替わって、副次的課題としていた日本における文明論――そこでは必然的に、西洋とりわけヨーロッパとの関係に焦点が当てられる――の検討を主要主題へと格上げし、とりわけ加藤周一の研究を進めた（また、ロマン主義時代の著作家から選ばれた新たな形象としては、メーストルではなくスタンダールを取り上げることとした）。そのことを確認したうえで、三つの主要主題それぞれについて、以下に簡単に成果と今後の見通しを記す。

（１）ロマン主義
ポール・ベニシュー『フランス・ロマン主義』四部作の翻訳を進める傍ら（翻訳③、また第２巻『預言者の時代』も間もなく刊行予定）、ロマン主義の文化現象の汎ヨーロッパ的性格を踏まえつつ、各国独自の特徴を考察する作業の成果として、図書①に所収の項目「フランス・ロマン主義」を執筆した。そこでは、レヴィ＆セールおよびヴァイヤンのロマン主義論を通し、ヨーロッパ規模の運動の共通性を浮びあがらせたうえで、ベニシューの議論に即して、一方ではフランス・ロマン主義に固有の展開が跡付けられ、他方では、それが持つ一種の範例的性格が示唆されている。論文⑧のベニシュー論は、彼のロマン主義理解が形成された両大戦間期から冷戦期にかけての歴史的・思想的状況に注目することで、その議論の今日的意義を改めて見定めようと努めるもの。論文⑦では、ベニシュー『作家の聖別』の枠組みを踏まえつつ、シャトーブリアンにおける文学的近代性の誕生を、そのパスカル受容との関連で明らかにした。また、スタンダール研究に取り組み、このすぐれてヨーロッパ的な知性が各国の文化に注ぐ眼差しの検討によって、近代社会の展開とヨーロッパ理念の射程について、ニュアンスをもった考察を進めることができた。さしあたりの成果としては、論文①⑤、発表②があるが、今後も、仏独（そして日本）での受容史の検討を含め、研究を継続していく。

（２）欧州統合
論文「ヨーロッパ理念の歴史と統合欧州の窮状」（図書⑤への寄稿）において、古代ギリシアから 21 世紀の現在に至るまでのヨーロッパ理念の変遷を概観しつつ、それとネイションおよび文明の理念との絡み合いを検討した。とりわけ、ヨーロッパ政治思想史研究の大家であり、ニュージーランド出身のポーコックの仕事に注目することで、ヨーロッパ理念の外見上の連続性のうちに潜む歴史的断絶を明らかにするとともに、その今日的帰結を、ロルドンやバリバール、デリダやアンダーソンの欧州統合評価のうちに見定めた。論文④および書評その他⑭は、「ブレグジット」によって改めて国際的な注目を集めることとなった今日の EU の苦境が、ヨーロッパ理念の意義の再審を要請していることを論じたもの。ボルタンスキー社会学の変遷を主題とする論文⑥、そしてフランスのオランド政権の総括とマクロン政権の歴史的位置づけを試みた論文③においても、欧州構築の文脈が背景となっている。

（３）加藤周一
加藤周一は第二次大戦後、フランスを始めとするヨーロッパの思想・文学の紹介者として論壇で注目を集めたが、フランス文学の文脈では、今日に至るまで、「象徴主義的風土」の強調によって記憶されている。しかし仔細に当時の著作を調べるなら、彼は 1950 年前後には、むしろロマン主義を重視した文学史・思想史の構想を抱いていたことが明らかになる。この点を論じたのが論文⑥であり、発表③および図書③では、その成果を踏まえつつ、ヨーロッパにおけるロマン主義の展開との関係で、加藤周一の仕事の意義を捉え直している。こうして、ロマン主義的近代という枠組みのなかでの加藤周一の重要性を見出したうえで、フランスおよびヨーロッパをめぐる彼の議論の再検討を企てたのが、雑誌連載「加藤周一とフランス」である（書評その他②③⑤⑦⑩）。これらの成果の延長線上に加藤研究を継続し、書籍化するための道筋を付けることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８件）

① Daisuke KATAOKA, « Stendhal et l’expérience du miroir », *MLN*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, vol. 133, n° 4, septembre 2018（査読有、掲載決定済）
② 片岡大右、「「薔薇色をどうするか」への序説――モノクロームの世界のなかの金井美恵子」、『早稲田文学』、筑摩書房、2018 年春号、74-91 頁（査読無）
③ 片岡大右、「予告された幻滅の記録――オランド政権の歴史的位置とマクロン政権の行方」、『世界』、岩波書店、2017 年 7 月号、166-175 頁（査読無）
④ 片岡大右、「「リベラルな西洋」の危機とヨーロッパの行方」、『ユリイカ』、青土社、2017 年 1 月号、143-151 頁（査読無）
⑤ 片岡大右、「サン＝レアルからスタンダールにかけての文学＝鏡の変容」、『仏語仏文学研究』第 49 号（塩川徹也先生古稀記念特集号）、東京大学仏語仏文学研究会、2016 年 10 月、199-215 頁（査読無）
http://hdl.handle.net/2261/61671
⑥ 片岡大右、「1950 年前後の加藤周一――ロマン主義的風土の探究と日本的近代の展望（上）」、『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』第 61 号、日吉紀要刊行委員会、2015 年 10 月、71-99 頁（査読無）
https://ci.nii.ac.jp/naid/120005764393
⑦ Daisuke KATAOKA, « Chateaubriand, disciple infidèle de Pascal », *Revue d’histoire littéraire de la France*, Paris, Presses universitaires de France, n° 3, juillet-septembre 2015, pp. 531-542（査読有）
DOI : 10.3917/rhlf.153.0531
⑧ 片岡大右、「ポール・ベニシューとその時代（一）」、ポール・ベニシュー『作家の聖別――フランス・ロマン主義１』（片岡ほ

か訳)、水声社、2015 年 1 月、655-678 頁（査読無）

〔学会発表〕（計　3 件）

① 片岡大右、「ポール・ベニシューと阿部良雄によるフランス・ロマン主義」、科学研究費補助金・基盤研究（C）「フランス第二帝政期の文学場と芸術美学」（研究代表者：菅谷憲興）、第 8 回研究会、立教大学、2018 年 2 月 16 日
② 片岡大右、「鏡の経験と「スタンダールのあまり愛されてこなかったヒロインたち」」、第 60 回スタンダール研究会、学習院大学、2016 年 5 月 28 日
③ 片岡大右、「ポール・ベニシュー、シャトーブリアン、加藤周一――フランス・ロマン主義と「宗教的なもの」」、第 13 回フランス政治思想研究会、東京大学社会科学研究所、2015 年 7 月 31 日

〔図書〕（計　6 件）

① 社会思想史学会事典編集委員会編、『社会思想史事典』、丸善、2018 年、片岡大右、「フランス・ロマン主義」（2 頁の項目、掲載決定済）
② 工藤庸子編、『論集　蓮實重彦』、羽鳥書店、2016 年 6 月、片岡大右、「「昨日」の翌朝に、「アカルイミライ」の約束もなく――蓮實重彦による「文学史」と「映画史」」（263-328 頁）
③ 宇野重規・伊達聖伸・髙山裕二編、『共和国か宗教か、それとも――十九世紀フランスの光と闇』、白水社、2015 年 12 月、片岡大右、「近代世界という荒野へ――シャトーブリアンと宗教」（61-98 頁）
④ 森本淳生編、『〈生表象〉の近代――自伝・フィクション・学知』、水声社、2015 年 10 月、片岡大右、「表象の失調に注がれる眼差し――スタンダールと鏡の経験」（73-93 頁）
⑤ 馬場智一編、『「ヨーロッパ」とその他者』、東京大学東洋文化研究所 CPAG ブックレット、2015 年 2 月、片岡大右、「ヨーロッパ理念の歴史と統合欧州の窮状――J. G. A. ポーコックの「ヨーロッパの脱構築」とフレデリック・ロルドンの「欧州主義」批判を中心に」（11-39 頁）
⑥ 三宅芳夫・菊池恵介編、『近代世界システムと新自由主義グローバリズム――資本主義は持続可能か？』、作品社、2014 年 10 月、片岡大右、「批判の新たな試みと労働編成の行方――ボルタンスキー＆シャペロ『資本主義の新たな精神』とその周辺」（214-235 頁）

〔その他〕

● 書評その他短文

① 片岡大右、「社会的なものの問い――アクセル・ホネットの現在」、『週刊読書人』、2017 年 11 月 17 日・3215 号、4 面
② 片岡大右、「加藤周一とフランス〈5〉　加藤周一とレジスタンス」、『ふらんす』、白水社、2017 年 8 月号、60-61 頁
③ 片岡大右、「加藤周一とフランス〈4〉　加藤周一とクレマンソー」、『ふらんす』、白水社、2017 年 7 月号、60-61 頁
④ 片岡大右、「「スタンダールのあまり愛されてこなかったヒロインたち」を復権する」、『スタンダール研究会会報』、日本スタンダール研究会、第 27 号、2017 年 6 月、12-18 頁
⑤ 片岡大右、「加藤周一とフランス〈3〉　加藤周一とサルトル」、『ふらんす』、白水社、2017 年 6 月号、60-61 頁
⑥ 片岡大右、「「知的ケンタウロス」の肖像」、『ピープルズ・プラン』、現代企画室、第 76 号、2017 年 5 月、153-156 頁
⑦ 片岡大右、「加藤周一とフランス〈2〉　加藤周一とド・ゴール」、『ふらんす』、白水社、2017 年 5 月号、60-61 頁
⑧ 片岡大右、「「女子力」とは別の仕方で……――自由と文学と女性」、『図書新聞』、2017 年 4 月 8 日・3298 号、8 面
⑨ 片岡大右、「シャンタル・ムフと「左派ポピュリズム」の展望」、『トランプ・ショックに揺れる世界／世界 臨時増刊号』、岩波書店、2017 年 4 月、162-163 頁
⑩ 片岡大右、「加藤周一とフランス〈1〉　加藤周一と『ふらんす』」、『ふらんす』、白水社、2017 年 4 月号、90-91 頁
⑪ 片岡大右、「「ユルム街の師」から何が残るのか？――没後四半世紀を経たアルチュセール」、『週刊読書人』、2017 年 3 月 10 日・3180 号、4 面
⑫ 片岡大右、「挑発する存在――フランスにおけるシェイクスピア」、『ふらんす』、白水社、2016 年 12 月号、19 頁
⑬ 片岡大右、「バーク的保守主義の歴史的性格」、『週刊読書人』、2016 年 10 月 28 日・3162 号、4 面
⑭ 片岡大右、「ＥＵ離脱論の背景」、『世界』、岩波書店、2016 年 9 月号、199-200 頁
⑮ 片岡大右、「都市社会学の冒険――追放者たちの郊外を照らし出す」、『図書新聞』、2016 年 6 月 25 日・3260 号、1-2 面
⑯ 片岡大右、「暴力をめぐる「現在性の存在論」」、『図書新聞』、2016 年 3 月 5 日・3245 号、8 面
⑰ 片岡大右、「「トロイカ」に抗して」、『週刊読書人』、2015 年 12 月 4 日・3118 号、4 面
⑱ 片岡大右、「社会的なものの行方」、『ふらんす』、白水社、2015 年 9 月号、73 頁
⑲ 片岡大右、「工藤庸子『近代ヨーロッパ宗教文化論――姦通小説・ナポレオン法典・政教分離』」、『cahier』、日本フランス語フランス文学会、第 15 号、2015 年 3 月、36-38 頁
⑳ 片岡大右、「革命の徴のもとに――19 世紀フランス文学の歴史性」、『ふらんす』、白

水社、2015 年 1 月号、73 頁

- 翻訳

① シャンタル・ムフ「ポピュリズムの挑戦」、『トランプ・ショックに揺れる世界／世界臨時増刊号』、片岡大右訳、岩波書店、2017 年 4 月、154-161 頁

② シャンタル・ムフ「ブレグジットは有益なショックになりうる」、片岡大右訳、『世界』、岩波書店、2016 年 9 月号、195-198 頁

③ ポール・ベニシュー『作家の聖別　フランス・ロマン主義 1 』、片岡大右・原大地・辻川慶子・古城毅共訳、水声社、2015 年 1 月、685 頁

- 企画立案・司会

① 「3 つの世紀のポール・ベニシュー――ユートピア、ライシテ、文学」（世話人・司会：片岡大右、報告者：杉本隆司・伊達聖伸、討論者：三宅芳夫）、第 41 回社会思想史学会大会、中央大学（後楽園キャンパス）、2016 年 10 月 30 日

６．研究組織

(1)研究代表者

片岡　大右（KATAOKA, Daisuke）
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号：30600225